ひ、のゝ去る、いでさせ給夜は曉までおはしまし、御ともの人などのたちやすらふも昔物がたりの心ちす、さべきむつましき殿上人御おくりすべき宣旨ありていとめでたし、殿ばらなど猶女こそもつべきものはあれなどめで給ふ、○中略御息所更衣などにみな中じやう少將のむすめ受領のもみなまゐりけるを、このちかき世にはおぼろげの人はまゐり給はぬものにならひたるに、いとあさましきなり、○中略三月○延久三年九日いらせ給ふ、ぎしき有さまいとめでたし、車五六ひきつゞけていと心ことなり、女御になりていらせ給、更衣などいひしをだに世にめでたくめづらしきことに思申しを、けさやかにめでたくいみじく世にためしなきことに、世人このころのことぐさに去けり、

〔空穗物語初秋〕かくてすまひの節、明日になりて、内にいとかしこくまかなひにあたり給へる宮す所かういたちと、まうのぼり給ふべき事をおぼしつゝ、てつくしたる御けしやうをしおはします、そのすまひの日、仁壽殿にてなむきこしめしける、なえむ思ひたがへたるなるべし、その日あしたの御まかなひには仁壽殿の女御、ひるのまかなひには承香殿の女御、よさりの御まかなひには式部卿の女御、かうゐ十人、色ゆるされ給へるかぎり色をつくして奉れり、更衣たちみな日のよそひし、あめの下のめづらしきあやのもむをたてまつりつくし、宮す所たちまかなひつかうまつり給はぬは、うないにてなむさぶらひ給ひけり、

〔空穗物語俊蔭二〕年十八にて侍從になりぬ、そのとしの五節の心みの夜、后宮よりはじめたてまつりて、おほくの女御更衣まうのぼり給へるにも、このいだしの五節のかたちよういはかなくうちふるまへるも人にはことにて、うへには御心とゞめて御らんず、

〔源氏物語桐壺〕いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなきはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり、はじめよりわれはと思ひあがり給へる御か